



卓球個人
全国中学校総合体育大会出場

「全国の経験を糧に」

小学1年のときに錦桜紅羅舞(東和町)で競技を始めた阿部は、卓球の楽しさを共有したいと小学4年のときに親友の伊澤知樹をクラブに誘う。技の技術や試合のマナーなどを教え合うなど、切磋琢磨しながら実力を伸ばし合った。

二人はそろって中田中卓球部に入部。昨年は中止になったため、中学2年で初の県大会へ臨んだ。138人が出場する中、順調に勝ち抜く阿部。準決勝ではしのぎを削り合ってきた伊澤との対決になった。互いの癖や技を知り尽くした中での試合に、序盤は接戦の展開。「弱気になったら負ける。積極的にいこう」と阿部が勝負に出る。攻めの姿勢が功を奏し伊澤に勝利すると、決勝も制して県大会優勝。続く東北大会で準決勝まで進み、目標としていた全中への出場を決めた。全中は1回戦で敗退したものの「コーチや仲間を支えられてここまで来れた。来年は個人、団体の両方で全中に出場して期待に応えたい」と、目標を語った。新チームで部長となった阿部が中田中卓球部を再び全国へ導く。

阿部 鴻憲 中田中2年



全国高校総合体育大会出場

陸上棒高跳び

(左)後藤 琉希 佐沼高3年
(右)青田 諒大

「二人で掴んだ全国へ」

中学生の頃から県内トップクラスの成績だった二人。違う中学だった二人が佐沼高でチームメイトとして、3年間切磋琢磨してきた。二人とも自己ベストは4尺50釐。練習方法も同じで、ただだらと時間を掛けない。決まった時間の中で、今何が必要なのか自分で考え効率良くメニューをこなす。普段から練習の様子を撮影し、気になるところはお互い指摘し合い、記録を伸ばしてきた。今年、東北大会で入賞した二人は、ついに目標だったインターハイへの出場を決めた。予選のバーの高さは自己ベストを超える4尺60釐でスタート。「跳べない高さではない。跳んでやる」と二人そろって意気込む。ポールをしならせ空に向かって脚を伸ばす。スムーズな動きでバーより上に体を持ち上げるも、体が触れてしまい3回連続の失敗。「力不足だった」と振り返る後藤に「頑張るだけでは跳べない。体の動きがイメージできなかった」と青田が続く。卒業後も競技を続けたいという二人。真つすぐ見つめる視線の先に未来の活躍を捉えている。

夏に挑む

Zoom Up Tome 2021 Special

「次につなぐ経験」

全国大会への出場を懸けた東北ジュニアゴルフ選手権(以下、東北大会)。「周りの結果は気にせず、マイペースを心掛けた」と振り返った。

中学生になり陸上部へ入部した加藤は、部活が終わってから近所の練習場でゴルフの練習に励む。時間の無い中でも毎日欠かすことなく練習に臨んだ。東北大会では、優勝候補と同組になるも、臆することなくマイペースを心掛け、コースを周る。雨が降り、他の選手たちがいつものプレーができない中、加藤はスコア80を記録。ベストスコア76に迫る好成績でラウンドを終え、2位で全国大会への出場を決めた。全国大会が開かれた東京ゴルフ倶楽部(埼玉県)は、今まで経験したことのない難度の高いコース。バンカーの多さやラフの長さに最後まで苦戦を強いられたまま、最終日に残ることが出来ず大会を終えた。「コースの難しさや全国の高いレベルのプレーなど、全てが勉強になった。中学生のうちに入賞を目指す」。さらなる高みを見据え、加藤の挑戦は終わらない。

女子12歳〜14歳の部
日本ジュニアゴルフ選手権競技出場



加藤 輝月 佐沼中1年

「実を結んだ猛稽古」

石坂が相撲を始めたのは高校から。顧問の先生が振る舞ってくれたちゃんこ鍋のおいしさが入部の決め手だった。初心者ながらメキメキと頭角を現し好成績を取ってきたが、全国の舞台では勝ち星に恵まれない。3年になり、部長としての重圧や試合へのプレッシャーから調子を落とす。練習では後輩にも勝てなくなっていた。「なにがなんでも全国大会で1勝したい」。その思いだけを胸に毎日一人きりで早朝練習や一日500回を超えるほどの腕立て伏せをするなど人知れず努力を重ねた。そうして臨んだ県大会では、持ち味である突き押し相撲で見事に優勝。自身3度目となる全国に挑む。初戦、得意の形に持ち込めずまわしをとられるが、落ち着いた取組で相手を押し出す。2回戦では、得意の突きで一気に相手を土俵際まで追い詰めたが、あと一歩のところでもわしを取られ投げを決められた。結果は2回戦で惜敗したが、全国で勝つという念願を果たし「自分の相撲を出し切った。悔いは無いです」と満足げに白い歯をのぞかせた。

相撲個人80キ級
全国高校総合体育大会出場



石坂 春輝 宮城農業高3年
(東和町・錦織3区)